

## 修理工事こぼれ話③④ 造営時の石工さんとその出身地

昨年9月分の工事報告で、楼門の礎石（そせき）の上面に文字が彫られていることを紹介しました。そこには、この礎石を加工し文字を彫ったであろう石工さんの名前と出身地が書かれていました。今回は、石工さんとその出身地について紹介します。



楼門 文字の彫られた礎石（解体中の写真）  
石造唐居敷が載っている箇所に彫られていました。



楼門 門扉正面（地震前）  
公募による提供写真



### 礎石上面に彫られていた文字

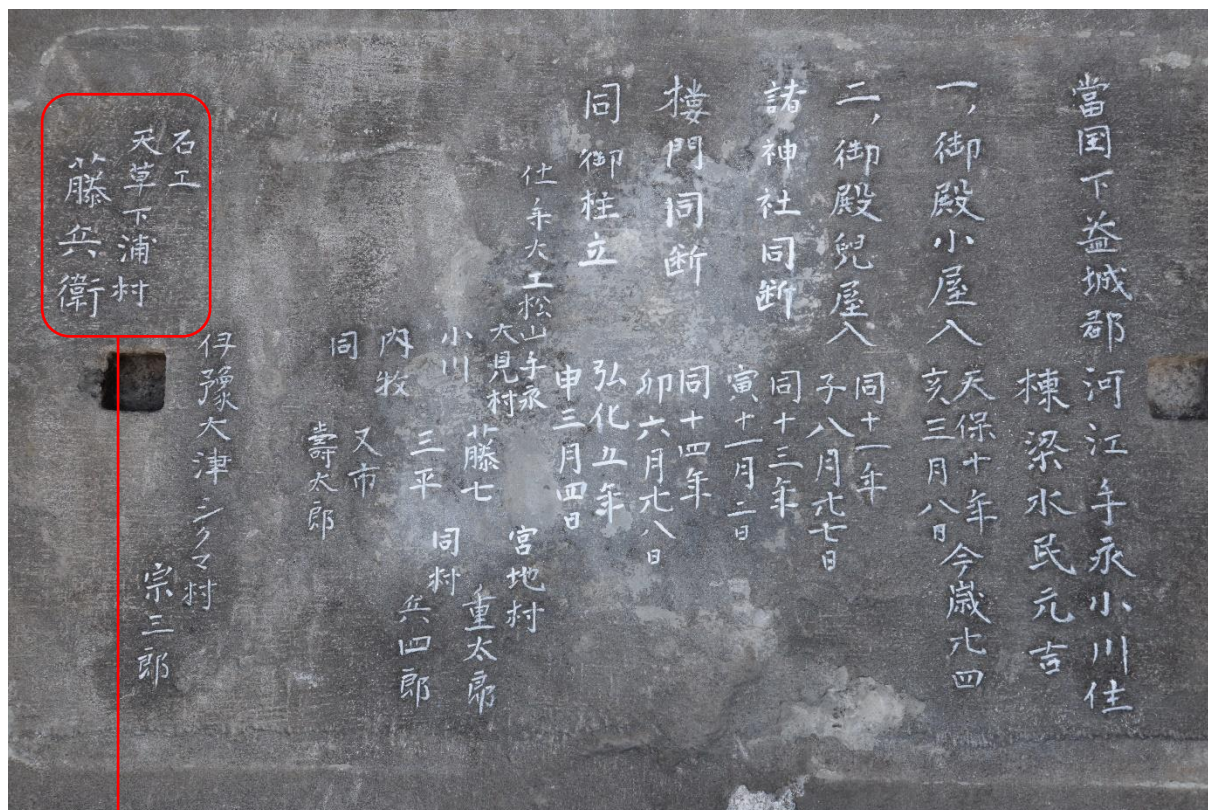
石造唐居敷を固定するために使われていたモルタルを職人さんに丁寧に削ってもらい、彫られた文字がすべて明らかになりました。  
その後、その文字を見やすくするため、白色絵の具を彫られたところに詰めたり塗ったりし、次ページの写真を撮影しました。

## 1. 彫られていた文字の内容

書かれている内容は右から、大工棟梁の名前と出身地、神殿3棟と楼門の小屋入（造営が開始された時）の日付と楼門の柱立（柱の立て始めの時）の日付、仕手大工（大工棟梁の下で造営に参加した大工さん）の名前と出身地、そして、左上に造営に参加した石工さんの名前と出身地が書かれています。

この記録は、書かれた日付で一番新しいものが楼門柱立の日付であることから、そのタイミングで彫られたものであると思われます。彫られている大工さんや石工さんたちも、この楼門柱立のタイミングで参加していた方々だと思われます。

石工さんは、「藤兵衛」という名前で、天草の下浦村という村の出身とのことです。



彫られていた文字の内容

当国下益城郡河江手永小川住  
棟梁水民元吉

一ノ御殿小屋入 天保十年 今歳廿四  
亥三月八日

二ノ御殿児屋入 同十一年  
子八月廿七日

諸神社同断 同十三年  
寅十一月二日

楼門同断 同十四年  
卯六月廿八日

同御柱立 弘化五年  
申三月四日

仕手大工 松山手永 宮地村  
大見村 藤七 重太郎  
小川 藤七 同村  
内牧 三平 兵四郎  
同 又市  
壽太郎

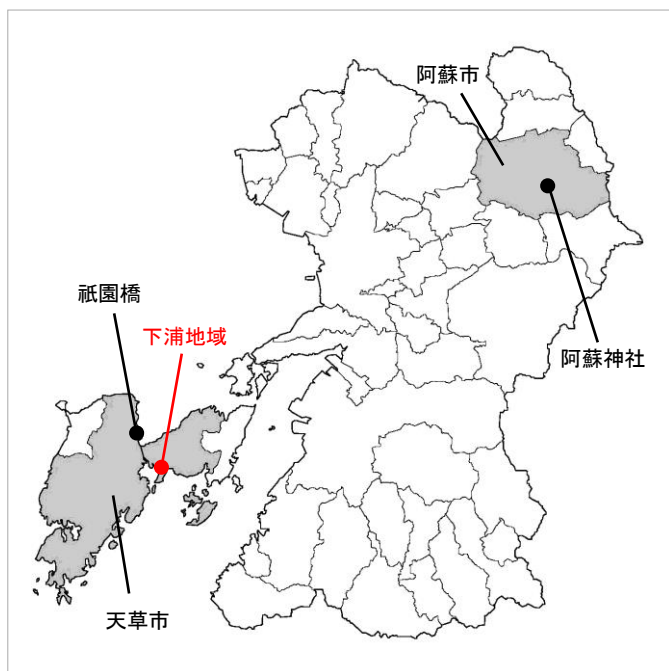
伊予大津シクマ村 宗三郎

石工 天草下浦村 藤兵衛

## 2. 石材と石工の里、天草下浦地区

下浦（しもうら）地区は、熊本県天草市の上島南西部にあります。18世紀後半に肥前の住人であった松室五郎左衛門という人が、下浦地区に石工としての技術を伝えたと言われています。また、石材として良質な石が採れる地域でもあり、「下浦石」と呼ばれる砂岩が天草内外の石造物に使用されています。国指定重要文化財をみても、天草市本渡地域の市街地にある祇園橋は、辰右衛門という石工さんが下浦石を使用して建造しています。開国した直後の長崎においても、グラバー邸の庭石は下浦の多くの石工さんが下浦石を用いて敷設して完成され、大浦天主堂・オランダ坂の石畳は下浦の石工さんの手によって完成されたそうです。

阿蘇神社楼門造営に参加した下浦の石工藤兵衛も、このような石工集団のうちの一員として阿蘇まで出張して基礎石を加工していたのでしょう。



各所の位置（熊本県）



下浦阿蘇神社 鳥居

大正2年（1913）に、下浦の石工さんたちによって下浦石で造られた鳥居です。



国指定重要文化財 祇園橋

天保3年（1832）建造。平成9年（1997）重要文化財に指定。

### 3. 阿蘇神社の石材は下浦石か

下浦地区は石工さんを輩出し石材も産出した地区です。石工さんが下浦出身ならば、阿蘇神社の社殿で使われている石材も下浦石なのではないでしょうか。

左の写真は、砂岩である下浦石で造られた祇園橋のアップ写真です。苔むしてもいまますが砂が固まってできた石ですので、肉眼でも砂状の粒々が見えます。

右の2枚の写真は、阿蘇神社楼門の基礎石のアップ写真です。神殿・脇門の基礎石も同じ種類のものが使用されています。砂状のざらざらした質感ではありますが、ところどころ大きな粒があります。阿蘇山の火山活動によって安山岩や溶結凝灰岩が生まれ、様々な場所で石材として使用されていることも考慮すると、阿蘇神社の基礎石は砂岩ではなく安山岩や非溶結の凝灰岩であるように思われます。もしそうであるならば、阿蘇神社造営の際は、石材は阿蘇の現地で調達し、石工さんだけ下浦から来てもらったのかもしれない。



祇園橋のアップ写真

砂岩である下浦石で建造されています。



阿蘇神社楼門基礎石のアップ写真（右上、右下）

凝灰岩や安山岩ではないかと思われます。



以上、阿蘇神社造営時の石工さんとその出身地についてみてきました。

阿蘇神社から下浦地区まで行くには、現在でも車で3時間弱かかります。造営当時ですと、下浦から阿蘇まで来るのに何日かかったのでしょうか。しかも天草は熊本藩領ではなく天領でしたので、同じ肥後国といえど国をまたいで来ているようなものだったと思います。

明治時代以降も下浦は石工さんの里であり続け、九州中に下浦石工の系統の石工さんを輩出したそうです。それだけ下浦の石工集団は腕が立ち、その腕によって大きな集団となっていたのではないのでしょうか。